

「ラストピース」

第
10

話

水瀬真理佳

へ登場人物一覧へ

鈴木理菜（9）（18）大学1年生

高橋湊（23）理菜のアパートの隣人

花村夏凜（18）理菜の親友

市川拓也（18）理菜の親友

西原圭吾（18）市川の友達

成宮翔（18）市川の友達

鈴木健一（41）理菜の育ての父

鈴木香澄（41）理菜の育ての母

白水透（54）バーのマスター

佐々木俊哉（45）ニュースサイトの編集長

塚目凜子（34）護身術の師範

竹内魁（20）高橋の兄

飯田茜（10）（19）理菜の同級生

飯田さゆり（34）茜の母親

阿部司（29）？

阿部美里（49）阿部の母親

阿部樹（22）阿部の弟

○三田大学・講義室内（朝）

授業が終わり、教授が講義室を出て行く。

親友・花村夏凜（18）、心配そうに鈴木理菜（18）とのメッセージ画面を開く。

へ夏凜…今日授業だよー！ 寝坊？
メッセージは既読になっていない。

夏凜「理菜どうしたんだろう……」

○同・建物前（朝）

夏凜、落ち着かない様子で理菜に電話をかける。

市川「夏凜！」

市川が合流。

夏凜「ねえダメ。理菜出ない……何かあったんじゃないよね？」

市川「とりあえず家行ってみよ」

夏凜「うん」

○大通り・歩道（朝）

夏凜、浮かない顔で市川の隣を歩く。

夏凜「湊くんがさ、言ってたよね。真犯人は理菜を狙ってるって。まさか連れ去られたりしたんじゃない？」

市川「あれはアイツの思い込みだから！へ落ち着かせるように心配すんなって。理菜のことだから、お婆さんたちが家出た後二度寝したんだよ。チャイムで起こしてやろうぜ」

夏凜「……そうだよ！理菜ってほつといたら夕方まで平気で寝てられるし」

市川「そうそう」

しかし、発言とは裏腹に市川の表情が強張っている。

○同・交差点（朝）

道路沿いにはパトカーが止まり、黄色い規制線が張られている。

警察官が信号の代わりに車を誘導。

規制線の中では捜査員が写真を撮っており、規制線の外には野次馬。

夏凜「どうしたんだろう」

市川「事故か？」

通りがけに歩道の血痕が見える。

夏凜「……血だよねあれ」

市川、頷く。

女性1「結構血が出てたらしいけど大丈夫かしらね」

女性2「大学生くらいの女の子だって聞いたわよ」

市川と夏凜、通りがけに聞こえた会話で顔色を変える。

市川「今大学生の女の子って言いました！？」

女性1「（驚いて）え、ええ……私も直接見たわけじゃないんだけどね」

女性2「車が信号無視して突っ込んできたって。轢かれなかったのは良かったんだけど、ここに飛び込んだ時に強く頭打ってすっっごい出血だったらしいわよ」

夏凜「その子、病院に運ばれたんですよ

ね！？　どこの病院ですか！？」

女性1「さあ。ごめんなさいねそこまでは」

市川、痺れを切らして警察官に声をかける。

市川「あの！　事故に遭った子はどこに運ばれたんですか！？」

警察官「被害者のお知り合いですか？」

市川「そうです！　大事な人なんです！　早く教えてください！」

警察官が困っていると夏凜のスマホに着信。

夏凜「拓也！　電話！」

と、理菜からの着信を見せてスピーカーにする。

理菜の声「もしもし？　ごめんねたくさん連絡くれてて」

夏凜「理菜！？　平気なの！？　今病院？」

理菜の声「なんで病院って知ってるの？」

夏凜「私たち今交差点にいる！　そしたら大

学生の女の子が事故に遭ってすごい出血だ
ったって聞いて！

理菜の声「私は全然何ともないの。（泣きそ
うな声で）でも湊くんがっ……私のこと助
けてくれたせいで……今手術してる」

市川「どこ病院？」

理菜の声「拓也……？ 神山病院って所」

市川「分かった。俺たちもすぐ行くから」

理菜の声「（鼻水を吸る音）うんっ」

夏凜、電話を切る。

市川「タクシー呼ぶわ」

と、タクシーアプリを開く。

○神山病院・救急外来

理菜、ソファに座り、扉の前で祈るよ
うに手術中のライトを見つめる。

白水「理菜ちゃん！」

マスター・白水透（54）が到着。

理菜、ソファから立ち上がって、

理菜「マスター！」

白水「連絡ありがとう。湊はまだ手術中？」

理菜「はい……」

白水「そうか」

と、ソファに座る。

理菜「（俯きながら）私のせいです……もし

湊くんに関わったら私……」

白水「大丈夫。アイツはそんなやわじゃない」

と、理菜の肩をさすって座らせる。

× × ×

壁にかかっている時計の長い針が1周する。

自動扉が開き、スクラブを着た医師が出てくる。

理菜と白水、立ち上がる。

医師「無事に終わりました。命に別状はありませんが、患部が頭なのでしばらく入院しましょう」

白水「ありがとうございました」

と、お辞儀。

理菜、腰が抜けたように床に座り込む。

白水「理菜ちゃん！」

と、理菜の横にしゃがむ。

理菜、俯いたまま肩が震えている。

床にぼたぼたと涙が落ちる。

理菜「良かった……」

白水、優しい顔で微笑む。

○同・病室

4人床だがカーテンが閉まっているのは1床だけ。

高橋湊（23）が横になっているベッドの横に、白水と理菜が丸椅子に座る。

高橋は酸素マスクを付け、点滴とモニターが繋がっている。

カーテンの外から声が聞こえる。

夏凜の声「ここじゃない？」

理菜がカーテンを開けると夏凜と市川の姿。

理菜「夏凜、拓也！」

夏凜と市川、白水に軽く会釈して高橋の

周りに来る。

夏凜「湊くんどう？」

理菜「手術は無事終わった。麻酔が切れたら目を覚ますだろうって」

市川「理菜は？　どっか怪我は？」

夏凜「（理菜の服を見て）血出てるよ！」

理菜「私の血じゃないから大丈夫。湊くんが守ってくれたから……」

夏凜「そっか……」

白水M「（高橋に向かって）お前はほんと、理菜ちゃんのことになると無茶すんだよな」

と、父親のような眼差しで見つめる。

その時、白水のスマホに師範・塚目

凜子（34）から着信。

白水「ちよつとごめんね」

と、立ち上がり部屋を出て行く。

高橋が目を覚ますのをじっと待つ理菜と夏凜。

市川は腕を組んで窓に寄りかかり、外を眺めている。

点滴が繋がっている高橋の手がピクリと動き、ゆっくりと目を開ける。

夏凜「あ！」

理菜、立ち上がって、

理菜「（泣きそうな顔で）湊くん……！」

高橋「（掠れた声で）びょういん？」

理菜「うん。出血が酷くて、手術で縫ったんだよ」

高橋、酸素マスクを外す。

高橋「……理菜は？ 怪我、ない？」

理菜、目に涙を浮かべながら、

理菜「ないよ。湊くんのおかげで……ありがとう」

市川「……俺マスター呼んでくる。行こ夏凜」

夏凜「えっ、あ、うん」

市川と夏凜が病室を出る。

2人きりになった理菜と高橋。

高橋、起き上がる。

理菜「寝てなきゃダメだよ！」

高橋「……へーき」

高橋、何から話せばいいか気まずそうな顔をする。

理菜「なんであんな無茶したの？　湊くん死んじゃってたかもしれないんだよ！？」

高橋「でも死ななかった」
と、優しく笑う。

理菜「……いくら私がお兄さんの無実を証明するのに必要だとしても、」

高橋「それは違う！」

理菜「違くないじゃん！」

高橋、一呼吸おいて、

高橋「確かに、最初はわざと近づいた。同じ大学入って、バイトにも誘って。理菜のそばにいれば必ず犯人が現れると思ったから。許されることじゃないのは分かってる。本当にごめん」

理菜、やっぱりなという顔。

高橋「でも今は、理菜を守るためにそばにいたい」

理菜「……怖かった。湊くんまで私を置いて

「いっちゃうんじゃないかって」

高橋、理菜の手を握って、

高橋「何があっても俺はそばにいるから」

見つめ合う2人。

いい雰囲気のところカーテンが勢いよく開く。

凜子「湊！死んだら許さないからね！？」

慌てて離れる理菜と高橋。

佐々木「バカ静かにしろ！病院だぞ」

と、編集長・佐々木俊哉（45）が凜子の頭をチョップする。

凜子、理菜と高橋の様子を見て、

凜子「へニヤニヤして」あ、ごめん。もしか

して邪魔しちゃった？」

理菜「いえ！ど、どうぞ！」

理菜、立ち上がる。

佐々木「なんだ。案外元氣そうだな」

高橋「死んでなんかいられないですよ」

凜子「全く。心配したんだからね」

高橋「受け身とれなくてしくじりました」

凜子「治ったらまたみっちり稽古してあげるから」

高橋「お願いします」

白水「お、起きたか」

と、白水、夏凜、市川も中に入ってくる。

夏凜「お水とか買ってきました」

高橋「ありがとう」

佐々木「じゃあ悪いけど、顔見れたし俺ちよつと仕事戻るわ。今度一杯奢るから、早く

治せよ」

高橋「はい」

凜子「私もこの後教室あるから。ごめん、また顔出すね」

夏凜「私たちも帰ろっか」

市川「ああ」

白水「理菜ちゃんも。今日はゆっくり休んだ方がいい」

理菜「（名残惜しそうに）はい……」

白水「なんか必要なもんあれば言えよ」

高橋「はい。ありがとうございます」

一同が病室を出て行く。

○大通り・歩道（夕方）

夏凜と市川の後ろを歩いている理菜。

立ち止まって、

理菜「ごめん。先帰ってて」

夏凜と市川、理菜を振り返る。

夏凜「なんか忘れ物？ 待ってるよ」

理菜「やっぱり私どうしても気になる。湊く

んのお兄さんが犯人じゃないってどういう

ことなのか」

市川「でも話聞いたら、また辛いこと思ひす

んだぞ」

理菜「分かってる。でも……」

理菜、拳を握りしめる。

市川「分かった。行ってこい！」

夏凜、驚いて市川の方を見る。

理菜「うん。ありがとう」

と、元来た道を走って戻って行く。

夏凜「理菜大丈夫かな……」

市川「向き合う覚悟ができたんだよ。理菜なら大丈夫」

○病院・病室（夕方）

理菜「ハアハアハア……」

理菜、息を切らして高橋の病室にやってくる。

高橋「理菜？ どうした？」

理菜「（強い意志を持って）湊くん。お兄さんが犯人じゃないってどういうことなのか、ちゃんと教えて欲しい」

高橋「いや、でも……」

理菜「大丈夫。湊くんが一緒だから」

理菜の目は強い意志をもっている。

高橋「……分かった」

と、話し始める。

理菜N「湊くんは1つ1つ丁寧に、全てを教えてくれた。お兄さんがどんな人なのか、あの日お兄さんの職場が火事になったこと、

家には作りかけのオムライスが残されていたこと、そのままお兄さんは帰ってこなかったこと、お母さんが事故で亡くなったこと。そして、刑務所にいるお兄さんには、もう時間がないことも……

高橋「決定的な証拠があるわけじゃないから、信じられないのは分かるし、信じろとも言わない。でも、3年前に広尾台で同じような事件が起きたのは、偶然なんかじゃない。多分同じやつがやったんだと思う。実際、広尾台の事件はまだ解決してない」

理菜「（険しい表情で）私は……確かに犯人の顔を見た。一瞬だったけど。でも思い出せそうで思い出せない。湊くんのお兄さんじゃないとは言いきれなくて……」

高橋「大丈夫。理菜に思い出させようとか、そんなことは思ってないから」

高橋、理菜の頭を優しくポンポンとする。

※ ※ ※

（フラッシュ）

高橋（13）が理菜（9）の頭を優しくポンポンとする。

高橋「大丈夫、1人じゃない。俺が一緒だから」

※ ※ ※

理菜、目を丸くして高橋を見つめる。

高橋「？」

理菜「9年前、公園で遊んでくれたお兄ちゃん……」

高橋、くしゃっと笑って、

高橋「やっつと気づいた？」

理菜「分かったたなら教えてくれれば良かったのに！」

高橋「そこはさ。思い出してもらいたいじゃん」

理菜「時間かかってごめんね」

高橋「俺も。あの時行けなくてごめん」

理菜「いいよ。ちゃんとまた会えたから」と、抱きしめ合う2人。

○鈴木家・玄関（夜）

理菜「ただいま」

バタバタと音を立てて育ての父・鈴木

健一（41）と、母・鈴木香澄（4

1）がくる。

鈴木「理菜っ！ 大丈夫なのか！？」

香澄「怪我は？ やだ服に血が！」

理菜「違うの。これ私の血じゃないから大丈夫

夫」

香澄「じゃあ誰の……」

理菜「湊くんがね、助けてくれたの」

鈴木と香澄、表情が曇る。

鈴木「……そうか」

理菜「あのね、9年前の事件の犯人がまだ捕

まっていなかったのかもしれないの」

鈴木、首を横に振る。

鈴木「理菜。騙されてるんだよ」

理菜「3年前広尾台で起きた事件のこと覚えて

る？ 9年前と同じだった。その犯人は

まだ捕まっていんだよ」

鈴木「模倣犯だったんだろう」

理菜「そうかもしれない。でもそうじゃなかったら？　逮捕されてないから事件が起こったことになる」

香澄「彼の言うことを信じたいのは分かるけど、警察が逮捕したのよ？　間違ってたなんてそんなこと、あるはずない」

理菜「絶対には限らない！」

鈴木と香澄、理菜の圧に戸惑う。

鈴木「とにかく今日はもう休むんだ。理菜も疲れてるだろう」

理菜「……」

理菜は階段を駆け上がる。

鈴木、リビングに戻って行く。

○同・ダイニング（朝）

テレビがついている。

香澄はキッチンで後片付けをし、鈴木は新聞を読みながら朝食を食べている。キャリーケースを持った理菜が入って

くる。

理菜「じゃあ行くね」

香澄「（不安そうに）本当にアパートに戻る

の？」

理菜「うん。犯人が捕まってるなら、危険はないはずだし」

鈴木「いい加減にしなさい。一番危険なのは彼だ！ 理菜は彼への好意で冷静な判断ができてない」

理菜「お父さんこそ、湊くんのこと決めつけてる！」

鈴木「そんなに言うなら好きにしなさい！

何かあってからじゃ遅いんだぞ！」

理菜「うん、好きにする！」

と、リビングを出ていく。

鈴木「ふうー」

と、天井を仰ぐ。

香澄「ごめんね。嫌な役回りさせて」

鈴木「いいんだ。ガツンと言うのは俺の役目。

理菜には嫌われたらうけど」

と、テーブルに突っ伏す。

香澄「あの子はそんなことで嫌ったりしない

よ」

と、慰める。

鈴木「俺たちの頭が堅いだけなんだろうか：

：

香澄「どう捉えるかはその人次第だよ。受け入れられても、受け入れられなくても、どっちも間違っていない。きっと」

○病院・病室

高橋、頭の下に手を敷いて仰向けに寝転がる。

看護師の声「高橋さん面会の方来られました

よ」

高橋「はい」

と、起き上がる。

カーテンを開けると立っていたのは香

澄。

香澄「こんにちは」

と、お辞儀する。

高橋「あ、理菜の……」

香澄「突然ごめんなさい。ここに入院してるって聞いたの。具合はどう？」

高橋「もう全然なんとも」

香澄「よかった。ちょっとお話しできる？」

高橋「はい」

○同・談話室

テーブルと椅子が並ぶ。

香澄と高橋、対面で座る。

香澄、立ち上がって、

香澄「理菜を助けてくれたと聞いて。本当にありがとうございます」

高橋も立ち上がって、

高橋「やめてください。それより、理菜には関わらないっていう約束、守れませんでした。見守るだけのつもりだったのに、すみません……」

香澄、優しい表情で見つめる。

香澄「申し訳ないけど、私と夫はまだあなたの話を受け入れられません」

高橋「はい……」

香澄「もしあなたの話が本当なら、私たちはなんの罪もないあなたのお兄さんを9年もの間憎んできたことになる。私たちが悲しみ、もがき苦しんできたこの9年は一体なんだったんだって……犯人は警察が逮捕して事件は終わった、そこを疑い始めたら、もう何を信じればいいのか分からなくなる。だから、そんな簡単には受け入れられないの。情けない大人でごめんなさい」

高橋「いえ、そんなことは」

香澄「でもね、理菜は違う。あの子は多分、苦しい選択だと分かっている、自分で真実を確かめたい。親としてはやめさせなきゃいけないのかもしれないけど、理菜の気持ちも理解はできるの。もしあなたのお兄さんに罪を着せたまま逃げてる犯人がいるなら、それは絶対に許せないから」

高橋は頷く。

香澄「だからね……この間あんなことを言ったくせに調子が良いすぎるかもしれないけど、これからも理菜をどうかよろしくお願いします」

高橋「もちろんです。理菜のことは絶対守ります」

○理菜のアパート・外（日替わり）

一台のタクシーが止まり、中から荷物を持った理菜と湊が出てくる。

湊「理菜ありがと」

と、理菜から荷物を受け取ろうとするが、理菜は渡さない。

理菜「ダメだよ。無理させないでくださいって先生から言われてるんだから」

荷物を持って意気揚々と階段を上る理菜。

高橋は大人しく理菜の後に続く。
部屋の前に着いたところで、高橋のス

マートウォッチに白水から着信が入る。

高橋はそのまま話し始める。

高橋「はい、湊です」

スマホを使わずに通話をする高橋を見て目を丸くする理菜。

高橋が電話を終えると、

理菜「その時計で電話もできるの！？」

と、興味津々。

高橋「設定すればできるよ。短いメッセージも送れるし、写真も撮れるし、結構万能」

理菜「すごい！私も買おっかな……」

と、真剣に考える。

高橋「マスターがこの後バーに来てほしいらしいんだけど、行ける？」

理菜「うん！」

○バー・店内（夜）

ドアが開いて理菜と高橋が入る。

佐々木「もう大丈夫なのか？」

高橋「いつまでも休んでるわけにはいかない

し」

白水「退院したばかりで悪いな。今後のことについて少し話がしたくて集まってもらったんだ」

一同、真剣な表情になる。

高橋が裏から事件の資料を抱えて持つてくる。

理菜「これ事件の？」

高橋「犯人に繋がる証拠も、魁がやってないって証拠もないんだけどな」

理菜「見てもいい？」

高橋「もちろん」

白水「理菜ちゃんに新しい視点で見てもらえたら助かるよ」

理菜、真剣な顔で資料を読み込む。

凜子「魁くんはあの日、職場が火事になったと連絡を受けて家を飛び出したんだよね」
白水「職場に向かう途中にあったのが前田家、つまり理菜ちゃんの家だ。自分とはまるで違う暮らしぶりが伺えるその豪邸にどうし

ようもなく憤りを感じた魁は、言葉巧みに
家に上がる―

高橋「そして台所にあった刃物で住人を襲つ
た。我に返った魁は、第一発見者を装おう
と救急車を呼びながら外へ出たけど、外に
はちょうど火事のサイレンを聞きつけた近
隣住民が集まってた―

白水「服に血をつけた男が家から出てきたら、
犯人だと疑われても無理はない。それに魁
はその後の取り調べで『自分がやったかも
しれない』と容疑を認めた……これがこの
事件の真実とされたこと、表向きのストー
リーだ―

理菜、顔を顰める。

高橋「大丈夫？」

理菜「……事件の経緯とか動機は、いかにも
残忍な犯行そのものだけど、何もかもがあ
りがち、というか、筋書きが綺麗すぎて逆
に違和感がある。それに、湊くんのお兄さ
んが言った『やったかもしれない』って言

葉が気になって―

白水「俺が聞いても肝心の魁が、『警察に話した通りです』の一点張りでどうにもならなかったんだ。連日の取り調べてまともな精神状態じゃなかっただろうし、おそらく色んなことを考えて、自分が罪を認める方がいいと判断したんだと思う。だけど、やってないことをやったなんていいたくはない。そのせめてもの思いが込められた言葉なんじゃないかな―

佐々木「誰か魁くん以外の人間を見たっていうやつはいなかったんすか？ 1人くらいいるだろ―

白水「理菜ちゃん確かあの日、最初は自分の部屋にいたんだよね？―

理菜「はい。部屋で宿題をしてて、お腹も空いたし、そろそろご飯かなと思って下に：：そいえば！―

高橋「？―

理菜「もしかしたら見た人がいるかもしれな

い！」

高橋「ほんと！？」

理菜「うちの目の前が仲良かった友達の家だったんです。ちょうどお互いの部屋が同じくらいの位置にあって、毎日手振ったり人だけのサイン送ったりして遊んでました。あの日も確か、カーテン開けてお互い宿題してた気がする……だからもしかしたらその子が見てるかも」

白水「飯田茜ちゃんのことかな」

理菜「そうです！」

佐々木「近所なら当然警察も聞き込みしてますよね？」

白水「ああ。母親が外の様子を見に家の外に出てるが、見たのは魁だけ。子供は何も見えない」

理菜「（がっかりして）そうですか……」

凜子「でも理菜ちゃんのおかげでまた新しい情報が得られたよ。ね」

高橋、頷いて、

高橋「ありがとう」

理菜「うん」

理菜、浮かない顔。

○三田大学・食堂

理菜、スマホを見てばかりで箸が進んでいない。

夏凜「どうしたの。眉間に皺寄ってるよ」

理菜「うっ」

と、眉間を押さえる。

夏凜「何か調べ物？」

理菜「探したい人がいるんだけど、フルネームでSNSやってる人ってまあいらないよね」

夏凜「そんなの芸能人くらいでしょ」

と、理菜のスマホを覗き込む。

夏凜「この飯田茜って子を探してるの？」

理菜「そう。長野でうちの家の前に住んだ子なんだけど、9年前のこと何か覚えてるかもしれない」

夏凜、目をパチパチさせる。

高橋「どうかした？」

夏凜「私、小学校の同級生に同姓同名の子がいる」

理菜「夏凜それ本当！？」

夏凜「うん……そんなに仲良かったわけじゃないんだけど、小学校の途中で長野から転校してきた子だからよく覚えてる。ちよつと待ってね、同窓会の写真あるかも……」

夏凜、スマホで写真を探す。

理菜と高橋は期待の眼差し。

夏凜「ほら、この子！」

と、写真を見せる。

理菜、目を丸くして、

理菜「茜ちゃんだ……大人っぽくなってるけど、間違いないと思う！」

高橋「（鬼気迫った表情で）この子と連絡とれる？」

夏凜「わ、分かった！」

○カフェ・店内

同級生・飯田茜（19）が窓の外を気にしながら座っている。

夏凜「茜ちゃん」

茜「夏凜ちゃん」

夏凜「ごめんね急に連絡して」

茜「ううん。嬉しかったよ。久しぶりだね、

元気だった？」

夏凜「うん、元気元気」

茜「はい、メニュー」

と、メニューを渡す。

夏凜「ありがと。実は今日ね、他にも茜ちゃんに会いたって子がいて」

茜「？」

夏凜「理菜！」

と、入口の方に向かって手を挙げる。

理菜が入ってくる。

隣には高橋。

茜、驚いた顔で立ち上がる。

茜「理菜……？」

理菜「久しぶり。茜ちゃん」

と、ニツコリ笑う。

茜「久しぶり……（そちらは？）」

と、高橋を見る。

理菜「彼は高橋湊くん。私たち3人同じ大学なの」

高橋「高橋です」

茜「（頷いて）初めまして。飯田茜です」

夏凜「さ、とりあえず座ろ。私お腹すいちゃった」

理菜と高橋、夏凜と茜が隣同士に座る

× × ×

夏凜「でもまさか理菜と茜ちゃんが友達だったなんて、聞いた時はビックリしちゃった。家もお向かいだったんでしょ？」

茜「……うん。理菜も私も引っ越してからはすっかり疎遠になっちゃったけどね」

理菜「そうだね……」

夏凜「理菜とはね、中学からずっと一緒なんだ」

茜「夏凜ちゃんって確か中学受験して三田大

附属行っただけ」

夏凜「そう、よく覚えてるね！ 私たちはエスカレーター式でそのまま大学まで。湊くんは大学から一緒になったんだ」

茜「へえ……」

理菜「……茜ちゃんは？ 今学生？」

茜「うん。東欧大で法律の勉強してる」

夏凜「東大！？ すごいね」

理菜「小学校の頃から茜ちゃん頭良かったけど、ずっと頑張ってたんだね」

夏凜「今も刑事になる夢は変わってないの？」

理菜「刑事？」

夏凜「小学校の卒業文集に書いてあったよね

……？ あれ、違ったらごめん」

茜「よく覚えてたね。うん、今も変わってない。4年になったら警視庁の採用試験受けるつもり」

理菜、驚いた顔で頷く。

茜「（おそろおそろ）それで、今日はどうしたの？ ただ近況報告するために会いたか

「たったわけじやなさそうだね……？」

理菜、真面目な顔になる。

理菜「……実はね。9年前、私の家の事件のことで茜ちゃんに聞きたいことがあったの」

茜「（顔が強張る）聞きたいことって？」

理菜「ほら、私たちよく自分たちの部屋の窓から手振ったりしてたの覚えてる？　これとか」

と、手でジェスチャーをして見せる。

茜も同じジェスチャーをする。

茜「うん。（懐かしそうに）2人だけの秘密の合図だね」

理菜「そうそう。あの事件の日も確か2人で時間合わせて宿題してて……そこまでは覚えてるんだけど、私はその後の記憶が曖昧なの。それで、」

茜、理菜の話の途中で、

茜「（怯えながら）私が犯人の顔を見てるかもってこと？」

理菜「まあ、うん……ごめんね。散々警察とかにも聞かれたかもしれないんだけど……」

高橋「犯人の顔じゃなくても、気づいたことなんでもいい。もう1回あの日のことを教えてほしいんだ」

茜「あの……あなたはなんで……？」

理菜が心配そうに高橋の方を向く。

高橋「（大丈夫）」

と、理菜に眼差しを向ける。

高橋「俺はあの事件で逮捕された男の弟なんだ」

茜「じゃああなたのお兄さんが理菜の……」

高橋「でも兄貴はやってない。本当の犯人は別にいる」

茜「（呆れて）まさか、冤罪だったと？　そう言いたいんですか？」

高橋、頷く。

理菜「そのために私たち、新たな証拠とか証言を集めてるの」

茜の顔色が変わる。

高橋「力を貸して欲しい」

茜「そんなこと言われても私は何も……」

高橋「あの日窓越しに一緒に勉強してた理菜が部屋を出てからも、飯田さんはずっと自分の部屋に？」

茜「そうですけど」

高橋「あの時間帯に近くの自動車整備工場で火事があって消防車も出動してたし、その後理菜の家にもパトカーや救急車が来たから外は相当騒がしかったと思う。一回も窓の外を見たりはしなかった？」

茜の顔の血の気が引いていく。

茜「（自分に言い聞かせるように）理菜の家に人が入って行くのなんて見てません！」
高橋「……（問い詰めるように）じゃあ、誰かが出て行くところは？ 例えば刃物を持った血だらけの男とか」

※ ※ ※

（フラッシュ）

前田邸の玄関のドアが開き、玄関先のラ

イトが点灯。

中から手に包丁を持った男が出てくる。
カッパは返り血で真っ赤。

※ ※ ※

茜「……いい加減にして！ 見てないものは

答えられません！」

茜、財布から千円札を取り出しテーブルに置いて逃げるように席を立つ。

夏凜、立ち上がって、

夏凜「茜ちゃん！」

と、呼び止めるが茜は無視して店を出て行く。

理菜「私行ってくる！」

と、茜を追いかける。

高橋も後を追う。

夏凜「あ、ちよっと！」

と、手を伸ばす。

○大通り・歩道

通行人の流れに逆らい足早に進む茜と、

それを追いかける理菜。

理菜「茜ちゃん！ 待って！」

茜、後ろの理菜をチラチラ気にしながら横断歩道を飛び出そうとする。

しかし歩行者信号は赤。

「ビィー」という車のクラクションが響く。

すんでのところで理菜が茜の手を引く。

理菜、息を切らしながら、

理菜「ハアツ、ハアツ、大丈夫？」

茜、小さく頷いて、

茜「……ありがと」

理菜「私が追いかけてやったから。ごめんね」

茜、俯く。

理菜「ちょっと話そうよ」

○公園・中

ブランコに座る理菜と茜。

理菜「今日は突然ごめんね。いきなりあんなこと言われても混乱するよね」

茜「……」

理菜、茜の様子を伺いながら、

理菜「私たちも切羽詰まってる……」

茜「私たちって……理菜はあの人の言ってること信じてるの？」

理菜「私もまだ半信半疑なところはあるよ……でも、その可能性はあると思ってる。実際、3年前に広尾台で同じような事件があったし、その犯人はまだ捕まってないから」

茜「その事件なら私も知ってる。でも場所も違うし時間も空いてて、共通点といえば一家が犠牲になったってことだけでしょ？」

理菜「確かにそうなんだけど……でも……」

茜「あの人、高橋さんだっけ？ 彼と何かあるの？」

理菜「何かって……？」

茜「彼のこと好きとか？」

理菜、言葉に詰まる。

茜「（呆れ笑い）ハハッ……なるほどね」

理菜「でもそれとこれは別に関係ないの！」

茜、立ち上がって理菜の前にしゃがむ。

茜「（諭すように）誰だって、自分の家族が殺人犯なんてそう簡単には受け入れられないよ。でも高橋さんの言ってることはただの妄想！ 彼がそれを信じるのは勝手だけど、理菜までそれを鵜呑みにしないで。こんな刑事の真似事して、理菜のママたちどんな気持ちで見てると思う？ 引っ張られちゃダメだよ！」

理菜、膝の上で拳を握りしめる。

茜、何も言わずに公園を出て行く。

○同・公園の外

理菜、俯きながら公園から出てくる。

外には高橋が立っている。

理菜「！」

高橋「理菜……」

理菜、ニツコリ笑って、

理菜「夏凜のところに！」

と、高橋の横を通り過ぎる。

高橋、難しい顔をする。

○カフェ・店内

夏凜「理菜、湊くん！」

夏凜が座っている席に理菜と高橋が戻ってくる。

夏凜「おかえり。茜ちゃんは？」

理菜「公園でちょっと話して帰ったよ」

夏凜「そっか……なんだって？」

理菜、努めて明るく、

理菜「……うん。何か分かったら連絡くれるって」

高橋、何か言いたげな顔。

○東欧大学・講義室

教授「今日は過去に実際にあった冤罪について紹介していきます」

茜、窓際の席に座っている。

手元のスライド資料をめくる。

①、②、③と冤罪事件のページが続く。

※ ※ ※

（フラッシュ）

高橋「でも兄貴はやってない。本当の犯人は別にいる」

理菜「そのために私たち、新たな証拠とか証言を集めてるの」

※ ※ ※

茜、資料から目を逸らすように窓の外を見る。

○同・キャンパス内

高橋「あの。学務課ってどっちですか？」

と、女子2人組に話しかける。

女子1「学務はここ真っ直ぐいった建物です」

高橋「あっちか。ありがと」

と、言われた方へ歩いていく。

女子2「（小声で）ちょっと。もう少し会話

広げてよー！」

女子1「（小声で）だってなんか怪しそうじゃない？」

女子2「（小声で）でもイケメンじゃん！」

女子2は高橋を追いかけて、

女子2「あの、何か探してるんですか？」

高橋「法学部の人を探してるんだけど、名前しか知らなくて」

女子1「法学部なら知り合いいるから分かるかも！　なんて人ですか？」

と、さっきまで警戒していたのに、咄嗟に言葉が出てしまう。

女子2は「怪しいんじゃないの

？」と、言いたげな顔。

高橋「飯田茜さんって人なんだけど」

女子1「飯田茜……」

女子2「茜なら私サークル一緒ですよ！　連

絡してみますね」

高橋「ほんと！　助かる」

○同・講義室前

授業を終えた学生たちが教室から出てくる。

茜も講義室から出てきて、顔を上げて立ち止まる。

目線の先には壁に寄りかかった高橋。

茜、うんざりした顔で近づく。

茜「私を探してる怪しげなイケメン」ってあなたですか？」

高橋「いきなり来てごめん。ちょっといいから話せない？」

茜、ため息をつく。

○同・広場

ベンチで間を開けて座る高橋と茜。

茜「この前も言いましたけど、私から話せることは何もありません」

高橋「それは分かってる。そうじゃなくて、今日は理菜の誤解を解きにきた」

茜、顔を顰める。

高橋「この間話したことは全部俺の考えで、俺が勝手にやってるだけだから。理菜は何も悪くない。それだけは分かってほしい」

茜「じゃああなた1人でやればいいじゃないですか！（切実に）理菜を巻き込まないで……！」

高橋「（辛そうな表情で）そうだな……」
と、立ち上がる。

高橋「じゃあ俺はこれで」

高橋、茜に背を向けて帰ろうとする。

茜「あの！」

と、呼び止める。

高橋、足を止めて振り返る。

茜「なんで……何をもって、あなたのお兄さんがやってないって思ってるんですか？」

高橋、リュックから資料を取り出して

同級生に渡す。

高橋「1つは9年前の古諏訪。もう1つは3年前、広尾台のやつ」

茜、資料に目を通す。

茜「知ってますよ。確かにどっちも家族がタ
ーゲットにされた点是一緒だけど。まさか
それだけなんて言いませんよね？」

高橋「いや、一緒じゃない」

茜「はい？」

高橋「この広尾台の時は一家全員が犠牲になったのに、9年前の長野の時、理菜だけは傷つけられずに済んだ。犯人は理菜が隠れたクローゼットの本当にそばまで来てたのに」

茜「だからなんなんですか？　そんなのたまたまかもしれない」

高橋「ああ。でももし犯人が1度目の反省を生かして2回目に臨んでいたとしたら？　理菜を見逃したことを後悔していたら？　俺は犯人が理菜を探してると思ってる」

茜「理菜が狙われてるってこと？　まさか、あなたそれで理菜に近づいたんじゃない？」

高橋、頷く。

茜「（呆れて）もういい、話にならない！　全然質問の答えになってないの分かってます？　結局、なんの根拠もないんじゃないですか！」

高橋「そう、今はただ魁が犯人じゃないって前提で話を進めてるだけだ。だからどんな些細なことでも、新しい情報が欲しい」

茜「無茶苦茶すぎ……刑事ごっこは1人でやってください。何も知らない素人が首突っ込んでいいことじゃないですから」

高橋「そうかもな。でも、もう魁……兄貴にはもう時間がないから」

茜「どういう意味ですか？」

高橋「もう、長くないらしい」

茜、言葉を失う。

高橋「死ぬのは避けられなくても、せめて最期の時は無罪放免で迎えさせてやりたいからさ」

と、歩き出す。

しかし数歩進んで茜の方を振り返って、高橋「俺はさ。兄貴が逮捕されても『じゃあ兄貴みたいな人を救える弁護士になろう』とか、『冤罪なんて生まない刑事になろう』なんて発想にはならなかった」

茜「……」

高橋「だからどうってわけじゃないけど、応援してる。大変だと思うけど、立派な刑事になれよ」

高橋、歩いて行く。

※ ※ ※

（フラッシュ）

理菜「ママア、パパア。ねえ起きてよ！　り
なもいっしょがいい！！」

と、棺の前で大号泣する理菜（9）。
それを見つめる茜（10）

※ ※ ※

茜「……エラそうに」
と、空を見上げる。

○バー・店内（深夜）

締め作業をしている白水と高橋。

白水「それで、何か収穫はあったのか？」

高橋「いや。何か知ってそうな感じはあったけど、本人は知らないの一点張り」

白水「仕方ないな。こればかりは1つ1つ当たっていくしかない」

高橋、心ここに在らずな様子で、

高橋「うん……」

白水「どうかしたか？」

高橋「いや、」

ドアが開いて理菜が戻ってくる。

理菜が戻って来たため高橋は言いかけた言葉をやめる。

白水「理菜ちゃんありがとう」

理菜「いえ！」

白水「2人とも今日は上がりでいいよ」

高橋「うす。(理菜に)帰るか」

理菜「うん！」

○大通り・車道(深夜)

車通りの少ない道、理菜を乗せて走る

高橋のバイク。

高橋「理菜ー！」

理菜「なにー？」

高橋「ちょっと寄り道してい？」

理菜「いいよ！」

○水辺の公園・芝生（深夜）

海の方こうに夜景が広がる。

理菜と高橋、芝生に座って夜景を眺める。

高橋、上着を脱いで理菜の肩にかける。

理菜「でも湊くんが……」

高橋「俺は大丈夫」

と、理菜を後ろから抱きしめるように

座り、理菜の両手を包む。

理菜「私ね、今度古諏訪に行こうと思ってる。

うちはもう取り壊されてるけど、あそこに

行けばまた何か思い出すかもしれないから」

高橋「……もう、大丈夫だからさ」

理菜「え？」

高橋「……やっぱりやめよう」

理菜「やめるって……？」

高橋「これ以上俺の妄想に理菜を巻き込むわ

けにはいかない」

理菜「それ、茜ちゃんが言ってたこと……もしかして聞こえてた？（明るく）気にしないで、あの時は茜ちゃんも気が動転してただけだよ」

高橋「今日、飯田さんに会いに行った」

理菜「え……」

高橋「ちゃんと全部説明して、理菜は何も悪くないって伝えたから。せっかく再会できたのに、俺のせいでごめん」

理菜「（小さく）待ってよ……」

と、呟く。

理菜、勢いよく高橋の方を振り返り、高橋の肩を掴む。

高橋「わっ」

と、体勢を崩し、理菜に押し倒される形に。

理菜「私はね、自分の意思で湊くんに協力することにしたの！ 私も、真犯人が野放しになってる可能性があると思ったから！

別に湊くんが好きだからとか、そんな理由で信じてるわけじゃない！」

高橋「……でもこの先も間違いなく理菜には辛い思いをさせることになる」

理菜「そうかもしれない……（目に涙を浮かべながら）今でも怖いよ？　もう10年近く経つのに、あの時のことを思い出すと心臓がギュツとなって体が震える。でも湊くんが一緒だから私は……！」

高橋の顔の横についている理菜の手が小さく震えている。

高橋、体を起こして理菜を抱きしめる。

高橋「そうだよな……ごめん。俺がビビってどうすんだよ」

理菜「1人で背負い込もうとしないで。私も一緒にいく」

高橋「うん」

高橋、理菜の後頭部を引き寄せて額を合わせる。

○三田大学・食堂

理菜、高橋、夏凜が席に座っている。

夏凜のスマホに着信。

夏凜「もしもし。今？　大学の食堂だけど」
と、応答。

茜の声「いた」

夏凜「え？」

理菜たちの席に近づいてくる人影。

理菜、それに気づく。

理菜「茜ちゃん……」

スマホを耳に当てた茜が立っている。

茜「（緊張して）ちよっと話せる？」

○同・空き教室

部屋の中には理菜と高橋と茜だけ。

茜、服の裾を握っている手が震えている。

茜「2人に話さなきゃいけないことがあるの
……」

理菜「あの日のこと？」

茜、頷く。

○（茜の回想）飯田家・茜の部屋（夜）

T「9年前」

茜 N「あの日。確かに私と理菜はいつも通り、一緒に勉強してた」

茜（10）、学習机で勉強している。

窓越しに向かいの家の部屋では理菜

（9）も同じように勉強している。

窓の外は小雨。

理菜、茜に向かってジェスチャー。

T「お母さんにご飯何か聞いてくる。待って」

茜 N「そしたら理菜がお母さんにご飯のこと聞きに行くって言って、部屋を出た」

茜、敬礼のポーズ。

T「了解！」

茜 N「すぐに戻ってくるだろうと思って私は勉強に戻ったんだけど……」

茜、再び机に向かう。

× × ×

茜 N 「いつまで経っても理菜は戻ってこなくて」

茜、理菜の部屋を見るが電気がついたまま部屋には誰もいない。

その時、前田邸の玄関が開き、センサーでライトがつく。

ドアから出てきたのは血がべっとり着いた包丁を持った男。

服装は全部黒く、返り血を浴びている茜、青ざめて机の下にしゃがみ込む。

55。

茜 M 「血だらけの人。顔はよく見えなかったけど、男なのは分かった」

（茜の回想終わり）

○三田大学・講義室

机の上には録音中のスマホ。

茜の話聞いている理菜と高橋の顔つきが変わる。

高橋 「それで、その男は！？」

○（茜の回想）飯田家・茜の部屋（夜）

茜（１０）が、机の下からゆっくりと窓の外を見る。

茜 N「何かが地面に落ちた音がして、もう一度窓の外を見ると、血だらけの男はいなくなつてて、その代わりに、門の外には別の男の人がいた」

地面に落ちた包丁に手を伸ばしながら前田邸の玄関を見る高橋 魁（２０）。ビニール傘をさしている。様子を伺うように玄関へ行き、ドアを叩いた後、家の中に入っていく。

（茜の回想おわり）

○三田大学・講義室

理菜「それってもしかして……！」

と、高橋を見る。

高橋、頷いて、

高橋「魁だと思う……」

理菜「（真っ青に）じゃあ本当に犯人は別に

……」

高橋「（皮肉を込めて）9年前にそれを言うてくれてれば……」

茜「（一生懸命）もちろん言った！ 警察に
もちゃんと話した！」

理菜「え？」

高橋「じゃあなんで」

○（茜の回想）飯田家・玄関（夜）

刑事が茜の母親・飯田さゆり（34）
に話を聞きながらメモをとっている。

茜（10）、廊下の角から走ってきて、

茜「わたし見たの！ りなの家からほうちよ

う持った血だらけの男の人が出てきたの」

刑事「それってこの男で間違いないかな？」

と、魁の写真を見せる。

茜、首を横に振って、

茜「ちがう！ この人は後から来た人だと思
う！」

刑事、困った顔でさゆりを見る。

さゆり「すみません。多分この子混乱してるんです」

さゆり、しゃがんで茜と目線を合わせる。

茜「お母さん、あかねウソついてないよ？」
さゆり「もちろん。誰も茜が嘘ついてるなんて思っていないよ。茜は自分の部屋に戻って」

と、促す。

茜、刑事たちを見ながら部屋に戻って行く。

○（茜の回想）同・リビング

茜 N「それからほどなくして、犯人が逮捕されたニュースが流れた」

テレビでバラエティ番組を見ている茜とさゆり。

速報で「竹内魁（20）を逮捕」とテロップが表示。

アナウンサー「ここで速報です。長野県古諏

訪町で起きた夫婦殺害事件で、警察は今日
竹内魁容疑者を逮捕しました」

画面には高橋魁の写真も表示。

茜「ちがう……お母さんちがうよ！ 犯人は
この人じゃない！」

さゆり、テレビ画面を消して床に膝を
つく。

茜の肩に手を置いて、

さゆり「怖かったよね。でももう大丈夫だか
ら」

茜「でもお母さん。さっきの人はちがうよ！
だって私見たもん！」

さゆり、頷く。

さゆり「驚いて記憶が混乱してたのよ」

茜「こんらんなんかしてない！ 私本当に見
たんだもん！」

と、目からポロポロ涙がこぼれる。

さゆりも目に涙を浮かべて、

さゆり「理菜ちゃんのお母さんとお父さんに
は茜もたくさん遊んでもらったもんね……

悲しいよね」

と、抱きしめる。

さゆり「茜はもう何も気にしなくていいんだよ。刑事さんがたくさん頑張って、ちゃんと悪い人捕まえてくれたんだから」

と、背中を撫でる。

茜、さゆりの腕の中で呆然とする。

（茜の回想おわり）

○三田大学・講義室

茜、目に涙を浮かべながら、

茜「お母さんにも警察にも信じてもらえなくて……でもあの時の私は、あれ以上どうすることもできなかった……本当にごめんなさい」

と、土下座する。

理菜「茜ちゃん」

と、背中をさする。

茜「今更こんなこと言ってもどうしようもないのに……」

高橋「そんなことない」

茜、顔を上げる。

高橋もしやがんで、

高橋「これまで俺は、ただ馬鹿みたいに魁が無実だってただ信じることしかできなかった。でも今日、飯田さんのおかげで犯人が別にいることがハッキリした。話してくれて本当にありがとう」

理菜もにっこり笑って頷く。

○バー・店の外（夜）

雨がしとしと降る音が聞こえる。

扉の前には「closed」の看板。

○同・店内（夜）

カウンターには事件資料が広げられている。

それを囲む理菜、高橋、白水、佐々木、凜子。

全員で録音した茜の証言を聞いている。

茜の声「結局お母さんにも警察にも信じてもらえなくて……でもあの時の私は、あれ以上どうすることもできなかった……本当にごめんなさい」

白水が録音の再生を止める。

白水「なるほど」

凜子「この証言があれば、魁くんがやってないって証明になりますよね？」

白水「（難しい顔で）うーん……」

凜子「そんな……」

理菜「あの時警察は、茜ちゃんが子供だから相手にしなかったんですか？」

高橋「それか、故意に証言を握りつぶしたか」

理菜「まさかそんなこと」

佐々木「組織ぐるみの揉み消し……ないことを願いたいけどな」

佐々木、目を伏せる。

理菜「一体誰が、何のために……」

と、唇を噛み締める。

窓の外では雨が降り続ける。

○港区の住宅街・ある家（夜）

小雨が降る中、ドアが開き、黒ずくめの男が家から出てくる。

開いたドアの隙間から、玄関で人が血を流して倒れているのが見える。

男は何事もなかったように軽やかな足取りで家を後にする。

途中に止めていた自転車に乗り、『ロンドン橋落ちた』の歌を口笛で吹きながら陽気に走る。

（了）